見 聞 録

第 16 回世界水素エネルギー会議見聞録

武蔵工業大学
水素エネルギー研究センター
山根　公高

学会の内容報告は、2006 年 7 月 20 日にタワーホール船堀で実施されたＨＥＳＳ主催第 16 回世界水素エネルギー会議報告会で報告されたとおりであるので、小生の見聞録としてはそれ以外のことについてつれづれなるままに以下に書きとどめた。

2 年前に横浜で開催された第 15 回に引き続き、第 16 回はフランス南部のリヨンで国際水素エネルギー会議が開催された。会場は、ローヌ川流域にある国際コンベンションセンターで行われた。会場の裏手にはローヌ川の蛇行により河川の一部が残った大きな三日月湖があるテットドール公園があり、前面を川、後面を森に囲まれ落ち着いたただ住まいの会場であった。

事務局の発表によると、今回の第 16 回世界水素エネルギー会議の延べ参加者は、約 1000 人、口頭およびポスター発表は、各 300 件であった。最終日に事務局担当者と話す機会があり、彼らは横浜の会議より参加人数が少なかったのを残念がっていた。

今回の国際水素エネルギー会議では、リヨン開催の前日にパリに集合して、フランスの誇るアリアンロケットの液体水素エンジンとタンクを製造しているメーカの見学が予定されていたが、残念ながら小生が出発する前日参加人数が少ないためキャンセルされた。そのお陰で十二分にパリ市内見学ができた。パリ市内に宿泊したのは、第 9 回国際水素エネルギー会議ですでに 12 年前のことである。そのときはルーブル美術館前のコンコルド広場に行けば必ず悪名高いジプシー集団がそこら中にたむろしていたが、今回はルーブル美術館、コンコルド広場、シャンゼリーゼ通り、凱旋門、エフエル塔およびノートルダム寺院周辺を散策したが、全くそのような集団は見当たらず安心してパリ市内の散策ができた。ルーブル美術館では、最近ルーブル美術館の地下に埋没していた城壁が発見され採掘されたままの状態で見学が可能となっていた。しかし、すべての説明がフランス語であり小生のような外国人にはその説明がチンプンカンプンであった。いくらフランス語が国際語であったとしてもその時代は変わってしまったことをもう少し認識して欲しかった。

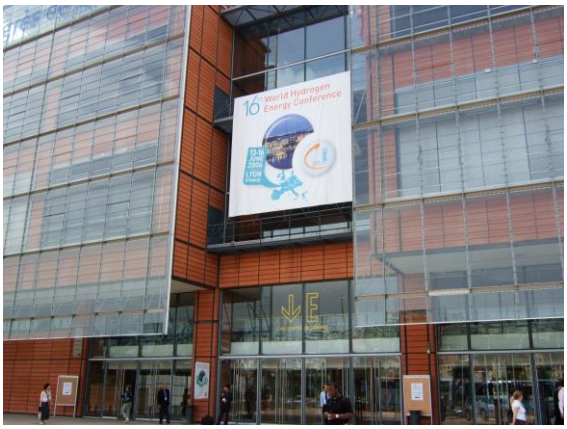

図１　第 16 回国際水素エネルギー会議の旗を掲げた国際コンベンションセンター

図２　三日月湖があるテットドール公園

学会でＴＧＶ乗車希望者に支給してくれた割引券は、非常に有効に利用することができた。6 月 12 日の午後、ＴＧＶで目的地のリヨンへ行くため学会事務局より頂いたＴＧＶ割引券をパリリヨン駅で提出して、リヨンの学会に 16 日まで参加して 17 日にシャルルドゴール国際空港から東京に向かいたいので往復切符を買いたいと申し出ると、親切にも切符売り場の係員が割引券を有効に使

うためには、シャルルドゴール空港からリヨン往復切符を買うことを勧めてくれた。通常で買う料金の半額で往復切符を購入することができた。リヨンまで2駅、約2時間ほどの乗車であった。野畑の広々した景色を眺めながらリヨンに着いた。

会場は、風光明媚なところであったが地下鉄、市街電車で近くまできて歩くか、バスを利用して会場近くまで来る必要があり交通の便はもうすこしであった。そのせいか、学会が4日乗り放題パスを無料でくれた。会場に隣接するヒルトンホテルを除いては、学会が紹介したホテルの中で最も近いホテルコングレス（小生宿泊）からは、大きな三日月湖があるテットドール公園を抜けてこなくてはならず、ホテルから 15 分ほど歩く必要があった。　毎朝8時30分から始まるプレナリーセッションに参加するのは、かなりの努力が必要であった。セッション会場の場所の案内が少ないため、慣れるまではなかなか部屋が見つからなかった。そのために良いこともあった。会場の案内をしている美人リヨンジャンヌに部屋の場所を度々聞くことができた。発表会場の広さは小生が参加した会場は充分であった。また、発表用ディスプレー設備も遜色はなかったが、発表用資料事前準備では、会場で用意したフォントの一部が日本で作製したものと異なっていたため修正を余儀なくされた。さらに問題は、

図3　ライトアップされたエフエル塔

図4　TGV でリヨンへ向かう

図5　車窓からみた一面の畑

図6　第16回国際水素エネルギー会議開会宣言をする IAHE ヴェツローグル会長

図７　朝８時30分からはじまる
プレナリーセッション風景

図８　恒例のディナーパーティでテーブル
マジックを楽しむ参加者

キーボードがフランス製のため会場アシスタントの指導下で実施する必要から予想以外の時間を要した。昼食は、展示会場を使って行われた。用意された食べ物は昼食としては問題がなかったが、展示場であるためいつも立ち食いを強いられた。展示を見てもらいたいという気持ちは理解できるが、食卓ぐらい用意したほうが良かったのではないかと感じた。

いつも恒例となっているディナーバーティは、今回、希望者のみが学会参加費とは別に参加費を払い参加するシステムであった。場所は、リヨンから専用バスで約１時間ほど離れた郊外にあるカジノの会場で行われた。参加者が多かったのか、適当な大きな会場がリヨン近郊になかったためか、会場の広さがとても狭いような気がした。アトラクションは手品と生演奏が行われた。恒例の国際水素エネルギー学会賞の発表がされ岩谷産業株式会社と小生の恩師でＨＥＳＳ元会長故古浜庄一先生が受賞した。故人である古浜庄一先生の賞の受理は、この受賞のために参加した武蔵工業大学学長中村英夫先生が受け取られた。

リヨンは、昔から食の町であるので、仲間と旧市街のレストラン街にいってワインとリヨン料理に舌鼓をうった。残念ながら塩辛く美味しい料理とは言えなかった。

図９　フェルビェールの丘に登るケーブルカー

ソーヌ川沿いの居酒屋で頂いた各種チーズは、日本では味わえぬほど美味なチーズでありその時頂いたビールと良い取り合わせであった。リヨンの食の楽しみはその程度で終わってしまった。リヨン市内の交通の便はとても良いため街に出たらタクシーは利用せず極力公共交通を利用した。学会で頂いた４日間乗り放題パスが大いに役立った。

リヨンの町は、ローマ時代から栄えた古い町である。リヨンを一望できることで有名なフェルビェールの丘にケーブルカーで登った。ローマ時代の街並みが眼下に広がりソーヌ川とのコントラストが印象的であった。読者でリヨンを訪れる機会があったら、是非ケーブルカーでフェルビェールの丘に登り、ソーヌ川のほとりのレストランでチーズとビールを頂いて欲しい。雑駁な見聞録以上で終わり。お疲れ様でした。

図１０　フェルビェールの丘から一望したリヨン